

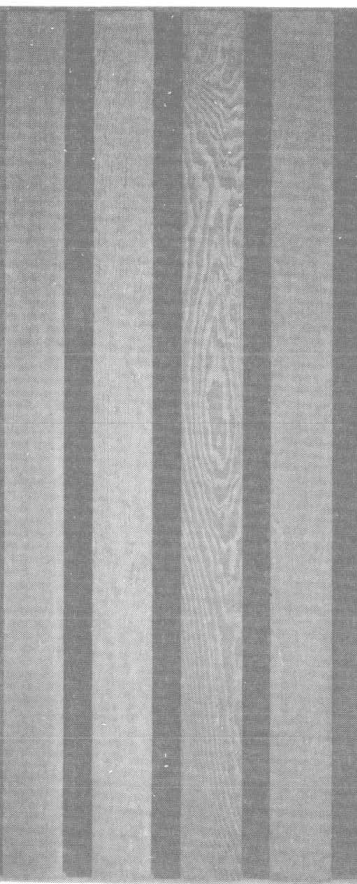
軽みの死者

富士正晴



軽みの死者

富士正晴



軽みの使者

一九八五年三月三十日第一刷発行

著 者 富士正晴

発行者 湊沢純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市淀川区豊崎五―二―一三 大淀ビル

電話〇六（三七三）三六四一

振替大阪四―三〇六四五七

印刷・ナニワ印刷 製本・小幡製本所

©1985 Masaharu Fuji

0093-8507-7641

定価一六〇〇円

輕みの死者
目次

游魂

7

吉川幸次郎 游魂の煙草代

53

死者が立ってくる

77

茫漠たる眺め

101

柴野方彦誄

125

老来漫步自殺行

141

軽みの死者

173

*

痛辛

大山定一との交際

三つの竹内好像

年上・同年・年下

序文

高安国世追悼

死者たち

202

204

212

217

222

226

230

カバー・扉 八木正作品（写真撮影／木村浩）

軽 み の 死 者

游 魂

御身ここへ来たり給いしこと他の人々に
語るにも及ばぬことに候ぞや

（桃花源記——狩野君山訳）

一

それは暁方であつたのだろうか。うすら白い光が曇った硝子戸越しに室の中をぼんやりと満たして居り、本のギッシリつまっている本棚は古めかしい断層のように書物の背を並べていた。そして室の隅の机や椅子のあたりにも霧のようにうす暗い闇の尾がただよい、心細い蚊の鳴き声がどこかに一筋たちのぼっているようだ。このたちのぼるといふ言葉がおかしい、どこか変なところがある、これは随分推敲の余地があるのではないか、そう思

った時、私は自分が昨夜の夜更に死んだ（！）ということに愕然とするのだった。

私の永い年月考えて来たところでは死のあとには何も残らない筈であった。死は深く考えるには当らぬ、見つめるべきではない、厭なことがらとしか思っていないかった。死ねば死にきり自然は水際立っている等と語録風に言つてのけた或る高名の彫刻家の言葉は私には別の世界のものでいささか氣にさわっていた。私は死とか自然とかに向つてこのような美しい詠歎を寄せる氣持は更々になかったのだ。後に至つて同じ人が失つた妻の靈と共にビールを飲み、妻がやはり生きてゐるということを信じてゐるらしい隨筆を記しているのも私には不氣味だった。死はもつての外のこと、怖ろしい不氣味な不愉快なことであつたにすぎない。日常茶飯のことがもつと大切、というよりは學問のことが大切、學問と家族と友人とそして考えの及ぶかぎりでの人類の生、これが大切であつた。死後の何々は考える余地ない別のことなのだった。今でも、別のことであると言いたいのだが、どうやら私がこうして死後の靈らしくあるので、別のことであると言ふには氣がさすのだ。

大して以前のことではない。研究室へ若い學者が訪ねて来て、たまたま話が死後の世界のことに移つた。私にとって甚だ奇妙なことに思へたのはその少壯學者が万更ではない憧憬を死後の世界に寄せていることであつた。シュペルヴィエルの小説にあるような風に、

死後の世界から小犬の姿で帰つて来て、中々未練のある妻君の不貞の実見者になるなどというのは感心しませんがね、そういうんじゃない、影も形もなくなつて誰にも気付かれず、自分が立ち去つて来た世界の成りゆきを眺めることが出来るというのは悪くありません。併し、私は気が知れないという感じをこの若い講師に抱いただけだった。あなた方の学問の方ではどうなのでしょう、色々な幽霊が、それも艶っぽいのが出てくるのではありませんか。女の幽霊とねんごろになつて、段々痩せおとろえて行きながら、しかも一刻一刻が状态的に快感であるようなあの様な美男の……。その時私の覚えた胸の底をチクリと刺すような嫌惡の氣持を私は表現するのに困つた。僕は儒学だからね、そんな話は余りしないことにしとるんだ。へへえ、儒学では幽霊の話はいけませんかね。私は歴史なのだから一寸何とかして死後の様子を眺めてみたいですね。しかし欲望として死後に感覺が残るということを先生なんか思われたことありませんか。先ず、そのような変なこと考える余裕はないね、その日その日の読書で手一杯だ、それから日常のごたごた。君達若いによくそんなこと考えるね、不思議だよ、それは。しかし……私はひよいとその時ウィリアム・ジェイムズのことを思い出して変な氣持がした。そして簡単にこの会話の深入りから手を切るために未不知生焉知死也。論語の一節を投げ出して置いた。それで別の話に移つ

た。

ウィリアム・ジェイムズの話というのは林語堂が一寸ふれたことのある「サン・ミケール物語」の中にある話で、それが果して本当のことか嘘のことか私は知らない。アクセル・ムンテを信用すれば事実ということになるのだろうが、私は友人からすすめられて大分前にこの書物を読んだことがあるばかりだ。

ウィリアム・ジェイムズの友人、これも高名の或る学者が怖らくはローマの或る豪華なホテルの一室で死のうとしていた。自由意志で死のうとしていたのではない。致し方なく将に死に瀕していたのだ。この二人の間には前から交された学問的な約束があった。例えば先に死んだものの屍体を残った医者が解剖するという風な約束。そのような約束は死ということとなかだちにするために如何にも契りという感じがしてよく守られるものなのだろう。私の場合私の墓碑銘はK教授がつくり、U教授の筆に成るとこれは判っている。Kの作る銘が司馬遷の作るそのように強剛の文章であるかどうかは生前、私は時折危んだ、一方Uの書の雄勁はもう少し後になれば枯れつつやめくだろうと期待をもっていたのだが、それも今は空しく私は少し早過ぎて死んだと思われる。怖らく私の期待するとき墓碑銘をつくる情に於いては十二分であっても、出来上った芸術的成果としては多分十分で

はあるまい。何故私がこう早く突然に死なねばならなかったかは天命というべきものであろう。だが人は悔んでくれるかも知れない。又は憐れむかも知れない。

ウィリアム・ジェイムズとその友達の学者との間に交わされていた約束は単に死をなかだちとした感傷を含んだ事柄ではなかったと記されている。それは是非ともお互の誰かの死が必要な契約であり、学問のための契約であり、心をしつかり保たねばならぬ契約であり、死ぬ側にも残る側にも超人間的な努力と力量とを要求する契約だった筈である。ウィリアム・ジェイムズは速記の用意をととのえて、今この世を去ろうとしている友のベッドの側にあった。そしてベッドの中の学者はスタートラインについて出発の銃声を待つ選手のように自分の死の告知を待っていたのだった。だが、告知者としてのドクトル・ムンテはこの二人の間の学問的契約を例い知っていたとしても、選手に向って銃声一発、出発を告知するにはベッドの中の「死人になった瞬間の死人」に死を告知することは出来なかったに相違ない。死はウィリアム・ジェイムズに向ってのみ告知された。友人の脈搏はとまり、ドクトル・ムンテの巧みな指尖の下でその眼は開いた瞳孔を示している。私はここを読んだ時、耐え難い程の凄絶な滑稽感にこころの奥底から揺り動かされたのだった。死は寧ろウィリアム・ジェイムズに向って告知される必要はなかったのだ。そうした有り

ふれた世俗的な手続きはウィリアム・ジェイムズとその友人との間には期待されていなかった筈だ。怖らく死を告げるドクトルの言葉すら不要と思われていた筈なのだ。死が始まると同時に、その生活環境の未曾有の激変による、或いは有るかも知れぬ失神を脱するや否や（それを脱する力量、意志力、学問的良心の存続は疑う必要がないという前提があった）、ウィリアム・ジェイムズの友人は死後の世界よりその体験を語りはじめの約束になっていた。それが現世の、例えばこの場合米語であるということは勿論のこととされ何の疑念も抱かれなかったに相違ない。従ってウィリアム・ジェイムズの右指は速記用鉛筆をしっぴりかまえて、速記用紙の上に迂り出そうとして居り、ウィリアム・ジェイムズの耳は大きく開かれて（もし耳を開くことが出来るとしたら）米語の一句のはじまるのを待ちかまえていたのだ。多分それは、吾が友、ウィリアムよ、余は死んだ、そしてこれまで誰もつたえたことのない貴重なこの体験を汝との生前の深い契約によってここに伝え得ることを悦び、且光榮とする云々というようなことになっていたのだろう。しかしその友人の死はアクセル・ムンテという流行児の医者によってウィリアム・ジェイムズに告げられても、一向に語りはじめなかった。友人は契約を破ったのだろうか。それともまた彼の失神が余りにも痛烈であつたのか。でなければ死というあの瞬間はそのままに釘付けられた終

止点であつて、死は始められたとか、私は死を出発したとか、そうした表現の許されないものなのだろうか。生前の私はひどく訳知れない不気味なコメディを感じたまま、ここを讀みとばして行つたのだつた。そして今、どうやら、死を実際出發している私としては、その時感じた滑稽を逆に甚だ体裁悪いものに思わざるを得ない。謂わば前世で吐いたつばが現世で私の額にふりかかったという風な訳柄になる。ウィリアム・ジェイムズはしばらく待った。もっと待った。随分待った。そして落胆し、今更ながら椅子の中にぐたりとくずおれて、友人の死を靈界通信をとる学者としてではなく、単に生き身の友人として泣いたと記されていたようだ。ウィリアム・ジェイムズが死んだ時、彼の靈界からの通信を採ろうとして枕頭に侍したものが有つたか無かつたかは知らない。アクセル・ムンテはウィリアム・ジェイムズの死水をとる光榮には浴しなかつたらしい……。

息を引きとつた友人の屍の前にし、その靈の通信の筆記に絶望して両腕の間に頭を支えねばならなかつたウィリアム・ジェイムズの心を通つて行つた悲しみは学的失望であつたのみならず他にいろいろ感懷があつたことだろう。しかしその場の情景を丸でドラマの一場面を見るように頭にまざまざ描かざるを得なかつた私に浮んで来た一句は物在人亡の四字に尽きたのだつたと記憶する。それはウィリアム・ジェイムズの感懷ではなく、第三者